

猪15 猪の胆 = = = 猪・鹿・狸より

つい近頃のことである。水力発電所の用水路へ、開設初めの年に、猪が幾つも陥ちたことがあった。朝になって水門口に掛かっているのを拾った。そのたびに所員たちが肉を取って喰ったり人に遣ったりしてしまった。なかに一人土地から出たものがいた。もちろん肉の分け前も取ったが、そっと胆を取って、これだけは一人占めにした。舎宅の縁側の庇に吊るしておいて、子供が腹が痛むなどと言うと、少しずつ刻んで吞ませたとする。そのためその一軒だけは、他の連中が揃って下痢をやった際にも、医者にも掛からずにしまったそうである。ある時所員の一人がそこへ遊びに来て、座敷に寝転んで世間話をしていた。



仰向いているうち、庇に吊るした黒い干乾びたものを発見した。これは全体何だと言うようなことから、だんだんわけを話すと、ひどく口惜しがったそうである。

万病の霊薬とは言い条、実際効験のあったのは、腹痛ぐらいであるとも言った。今から考えると、明治三六、七年頃は、猪の胆に対する一般の信望が、近在の医者殿より遥かに上であった。急病人の話などでも、第一に聞くのは、猪の胆を吞ましたかなどと言う、急

ぎ込んだ言葉であった。

ある時茸の毒に中てられた男が、座敷中転がって苦しんだ末、ようよう静かになったと思ったら、今度は堅く歯を喰い締めて、はや応答もないようになった。それを釘抜きの柄で歯をこじ開けて、水に浮かせた青黒い塊を注ぎ込んでやると、たちまち正気づいたと言うた。あるいはまた二日二晩苦しみ通した上、えらい熱で、どうやら危ないようだ、急に夜中になって身寄りへ飛脚を出した。それとちょうど一足違いに、猪の胆を持って駈け付けたものがあつた。急いでそれを吞ませると、飛脚のものが村端れの峠へ差し掛かったかどうかと思う時分に、はやおそろしい下痢が来て、そのままけろりと楽になったと言う。この様子では飛脚もいるまいと、慌てて飛脚を呼び返す二度目の飛脚を出した。そうして夜の白々明けには、その飛脚衆が揃って笑いながら還って来たなどと言うた。

山国のことで、猪の胆など如何ほどにも手に入りそうに思えるが、以前の村の生活では、あつても手に入れることは容易ではなかつた。まして平常から貯えておくなどは、物持ちと唄われるものかなんぞでない限り、叶わぬこととしてあつた。容易に手に入らぬだけ、それだけ霊能も高いとしたのである。

自分の知っているある女は、深夜に狩人の家を叩き起して、僅かばかり紙に拵って渡されたのを、しっかり掌の内に握り締めて、山路二〇町（約2.2km）を一飛びに飛んで還ったことがあったそうだ。ちょうど五月田植の真っ最中で、いろいろ仕事の手順を考えてみた。明日植代が掻けぬとなると、後の順が狂ってしまう、こりゃどうしても、朝までには快くせにゃならぬと、覚悟を決めた。病人の少し静まるのを待って、隣村の狩人の家へ飛んで行った。そうして猪の胆を手に入れて来て、病人の枕元に坐って、手塩に浮かせた黒い小さな塊を、うやうやしく押し戴いた時の心持は、忘れてはもったいないほど、ありがたかったと言う。

しかし後になって、その代を払うには、他人に話されもせぬほど、えらい難儀をしたと言うた。わずか七五銭の金だったそうである。それを支払うのに隣村の大海まで背負って行って、一把二銭何厘に売った薪（もや）の代を積んだ金で済ませた。他人のまだ寝ているうちに、荷拵えしては背負ったと言う。夏中かかってやっと纏めたが、男はよもやそんなことは知るまいと口惜しがっていた。



猪の胆は、胆嚢です。

吊るしておくとも2、3日で干乾びて固くなります。

最近では、マニア以外は吞まないでしょうね。